

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	教材の中の連想を子どもはどう受けとめているか : 下界の星を例として
Author(s)	藤村, 雄一
Citation	児童の言語生態研究 , 1 : 42 - 48
Issue Date	1968-05-05
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045024
Right	
Relation	



教材の中の連想を 子どもはどう受けとめているか

— 下界の星を例として —

藤村雄一

■はじめに■

文学による教育は現在の国語教育の中において、非常に大きな割合を占めていることは周知の通りである。

なぜ、我々は文学を子供に与え、それで教育しようとしているのか。

言うまでもなく、文学には子供を育てる多くの要素があるからであって、すぐれた文学作品を読むことにより、子供は深い感動を受け、読む楽しさを味わうものである。

その感動や楽しさは、それを読む子どもが作者の目を通して、日常生活の中で体験し得ない未知の世界を体験し、また体験しても、うっかり見のがしてしまうような事ながら意識的に体験させてもらえる喜びなのである。

この文学体験こそ、大切にしなければならぬのである。

人間は体験によって、自己を形成し、教育していくものであり、我々は日常生活のさまざまな体験を通して、培われてきた多くの経験を基にして、想像し、連想し、思考することによって、自己の人生観・世界観等を形成していくのである。しかし我々はそうした生活体験だけでは非

常に限られた狭い範囲内に閉じ込められるし、日頃体験してはいても、うっかり見すごしていたり、十分認識し得ないで過ごしてしまう場合も多い、そうした限られた狭い体験を、より広く、豊かなみずみずしい糧として高め、深めてくれるのが文学と言える。

「日常の世界——われわれの生身が呼吸している世界——現実——のなかの事物（もの・こと）の諸関係を、文学は独得なイメージでとらえ、それをことばで形象する。そのことばで形象されたイメージが読者に『おもしろさ』をひきおこすのである。」と、西郷彦彦氏は述べているが、作者のするどい目と心でとらえた感動、イメージを典型として形象化したものを、読者は思考力を働かせて想像し、連想して一般化・概念化するところに文学の読みがある。

しかるに、文学教育は文学の本来もっているそうした働きによって子どもたちに望ましい体験を体系的に体験させるといふことである。そういう体験を通して、人間生活の諸関係を想像し、連想し、思考する力を伸長してやることなのである。

そこで、我々が文学教育を考える時、どのような体験が望ましく、そ

れをどのようにして与えていくか、という問題が起こってくる。そこに教師の実践者としての主体性が要求されてくるわけで、文学教材の選方法、その過程等が挙げられる。

前述したような意味からも、文学作品を扱う場合、十分に作品を研究し、明確な自己の指導目標を持たないことには、教師の主体性はない。また、それに基づく児童の実態——内面的発達段階・言語生実態——を教師は明確に認識した上での教材選択が要求されなくてはならない。我々は長年の先輩研究者・実践家の経験から、この教材は何年生向きなどとおおよその見当はつけている。確かに当を得たものは多い。といって学校・学級の実情はさまざまであるはずだから、それで満足していることは許されないとと思われる。

教師自らの手で作品を発掘し、研究して子どもに与えることによって、子どもの主体的・創造的な読みへの発展となっていくのではなからうか。

現代の児童がどのような言語生態を示し、教材と対決しているか、その心理的実情を認識した上で教材選択があり、指導過程があるならば、

よりいっそう児童の内面へ食い込んだ指導がなされるのではなからうか。反省するところである。

子どもはどう読みとっているか

この研究主題を満足させるためには、作者の豊かなイメージによってとらえられ、形象化された作品であって、調査ということからできるだけ短いものが望ましいということから、火野葦平の「下界の星」を選んだ。幸い子どもたちは誰も読んでいない作品であったので、条件として申し分ない作品であった。

この「下界の星」は、私という主人公(作者)が一人の少年くつみがきに靴を磨かせる。星が自分の磨く靴に写るまで磨こうとする。その少年のひたむきな仕事ぶりに感動し、少年の姿(真心・誠意)のイメージを、「下界の星」と形象したもので、自身、好きな作品でもある。

この作品を玉川学園では、六年生の一学期のカリキュラムに入れており、やや高度と思ったが、あえて五年生の三学期に与えてみた。それには、作者の「下界の星」という連想に対する子どもたちの読みとりへの期待とその実態、さらに配列としての適否等を知り、他の作品の選択・

配当の基礎的な尺度・資料としても有効であると思ったのである。

さて、調査の方法として、いろいろな形が考えられるが、私は子ども読みの読みとりの実態という調査の性格上、一次感想を知りたかった。そこで、私が作品を一応便宜的に分けて読み聞かせ(子どもはプリントを持たず)、発問によって書かせていった。時間をできるだけとり、好きなだけ書かせることにより文字で書き表わせない子どもへ対して考慮した。いっさい話し合いによる集団思考の場をもたず、想像したこと、感じたことをという形で書かせていった。これによって、子どもの生の読みとりと、指導の過程・見通しが判断できると考えた。

下界の星

(文題)

下界の星とは何だろうか?

(ア) 人間(美しい心)としてとらえて美しい者	22	71%
(イ) 心の美しい人、みがかれた人、あなたがたい人、愛情豊かな人、子ども	(13)	
(ウ) 偉人のような人のこととしている者(シユパイツァー、ガケラ)	(4)	
(エ) 人間のこと(まずしい姉弟、悲しいことから幸せになる、人間のこと)	(3)	

○人間の目標として(心のともしび、希望、めざすもの)とたとえて

(イ) 地球上にある宝石などの光り輝く美しいもの、または花	5	16%
○宝石のようなもの	(2)	
○地上の光るもの正体不明	(2)	
○花園に光る水玉	(1)	
(ウ) 天上の星に対する地球のこと	2	7%
(エ) かざり物・電球のこと	1	3%
(オ) 地球に落ちてきた星のことと静かな情景	1	3%

(ア)・(イ)のように、文題をすでに象徴的な表現としてとらえている児童が90%であった。

象徴的な表現としての確にとらえている(ア)の子どものほとんど全員が、その根拠として、星は美しいものである。だから、星のように美しい心の人間として天上の星に対する下界の星、と連想しているのに対して、(イ)・(エ)の場合は、一応は象徴的なものと見てはいるがはっきりとしたものでなく、象徴としての深まりをつかんでいない。つまり、次の設問である「物語の予見」でそれが明らかである。象徴的表現として、宝石・光る物・水玉・電球を連想はしているが、それはあくまで「星」とのかかわり合いによって、主人公が

幸福(不幸)になるという想像である(三名)。「よだかの星」のイメージからか、不幸だったり、悪人だった主人公が死んだり、いい人になって星になる、というもの(二名)である。五年生になると大部分の子どもは抽象的・象徴的な表現をかなりの確にイメージ化し、連想へ結びつけていく力ができている。

文題から物語を予見する

(ア) 心の美しい人・立派な人・愛情の物語	23	74%
(イ) 星(または象徴としての)を媒体としての物語	3	10%
(ウ) 星になるという物語	2	7%
(エ) 星から地球へ来た人の話	2	7%
(オ) 星の予さまのような話	2	7%
(カ) 星と地球の物語	1	7%

二、三の例を挙げてみる。

① (ア)の男児 日本の下町に貧しい人がおり、ごみなど人の捨てたものをひろって町をきれいにしていた。こじきようだが、自分のよいと思ったことを困難に負けずにやりぬいていった人の話。

② (イ)の女児 ある場所に宝石のように光り輝く星のような物があった。その星は魔法のような物で、それを見つけた人は一度不幸になるがだんだんと幸福になっていく話。

③ (二)の女兒 ある小さな子ども
の星が勉強をなまけ、おかあさんの
言うことを聞かなかったので、下界
の小さな砂ばくに落とされてしまっ
た。子供の星は、そこでいろいろな
ことを体験していつの間にか立派な
一人前の星になって天上にもどつて
いくという話。

(一)
ある夜、上野公園の下を歩いてい
たとき、わたしは、少年のくつみ
がきにくつをみがいてもらった。
わたしは、足をつき出してみがが
せるのは、好きではないので、く
つをぬいでわたしだ。

書き出しのこの部分です。わ
たしと少年の人物形象と二人の關係
が表現されている。
当然、子どもは「わたしは、足を
…… くつをぬいでわたしだ。」に強
い印象を受けることは予想される。
①一番印象に残ったことはや文章は—

(ア) わたしは、足をつき出し てみががせるのは好きでな いのでくつをぬいで渡した	29	94%
(イ) ある夜、上野公園の下を 歩いてきた	2	7%
(ウ) ある夜	2	7%
(エ) 少年のくつみがきに、く つをみがいてもらった	2	7%
(オ) 少年の	1	3%
(カ) 足を	1	3%

二名だけ(ア)を書いていないが、一
人は「ある夜……歩いてきた。」と答
え「下界の星」から時と場所に意識
が働いたのであろう。もう一人は、
「少年の」「足を」であり、わたしと
少年の關係認識ができていていると見て
よからう。

②「わたしはだれでどんな人か—
(ア) 性別
男—主人公
男—作者
男—
女—主人公
30人

(イ) 年令
中年
35才ぐらい
40~45才
年をとっている
1 1 1 3

(ウ) 性格
やさしい
心がきれい
少し有名だが高ぶらない
こわがりや
1 1 1 1 1 1 1 1

(イ) 容姿
せが低い
ふつうのサラリーマン
上品な紳士
金持ち風
1 1 1 2 1 1

(カ) 服装
作業服・通勤着
2

スポーツシャツ
きざつぽい服
あんがいいきりつとした服
大きなオーバー・寒そう
1 1 1 1 1
3
(ウ) 時
仕事がいり
(会社)

③ わたしの人がらについて感じたこ
と—
この子はあとにやさしい人と書いて
いるところから、わたしの行為から
やさしい、すなわち女性というイメ
ージであったと推測される。

「よく気がつく」までは思いやり
が出たのには驚いた(女兒が、
この子はあとにやさしい人と書いて
いるところから、わたしの行為から
やさしい、すなわち女性というイメ
ージであったと推測される。)

やさしい	15
思いやりがある	9
きれいな美しい心	4
親切	3
神経質	3
よく気がつく	2
きちょう面	1
静かで落ち着いている	1
身なりのきちんとした人	1
よく考える	1
スポーツマンのよう	1
はずかしがりや	1
内気	1
気が弱い	1
目立たない	1

(数字はのべ人数)

があるに含めて考えられよう。ただ
神経質といった子は「足をつきだす
と、少年をさしているようなので、そ
のようなかつこうでみががせるのが
きらいである。だから神経質な人」
同じ理由から、思いやりのある人と
考える子もある。もつともみんなこ
の形象から「わたし」を概念化して
いるわけであるが、これだけの形象
では、まだ元気がよい、裏を返せば
粗っぽく落ち着きがない式の主観の
相違である。前者は気の弱い子であ
り、読者の人がらも感じとれる。

④ 少年のようすを述べなさい—
異口同音でまとめると「まずしく、
みなしごか、母が病氣である。容貌
は帽子(野球帽・つばのあるもの・ベレ
ー)はよこれ、ポロポロの服(すみで
よこれ)だったり、つぎがあたっている)
ジャンパーにジープン、またはだぶ
だぶのセーター、お父さんのお古か。
顔はすみでよこれている。」くつみ
がきの少年へのイメージもこれだけ
の表現と子どもたちの経験範囲では
常識的なものになるのもやむをえま
い。

(二)
少年は、たんねんに、じょうずに、
みがきをかける。そして、ときど
き高くくつを持ちあげてはすかし
てみる。またみがく。

この部分でかなり少年の形象はつきりしてきている。

①この部分で感じたこと、思ったこと

(ア) ていねいに一生懸命磨いている

21

- ・作者への感謝をこめて
- ・一人一人の客のくつをていねいにみがく、大勢みがいてもうけたいだろうが
- ・仕事にはほこりをもっていない
- ・もうよこれていないかたしかめ
- ・その他

(イ) 少年は心のきれいな人・やさしい人・正直な人

3

(ウ) 楽しそうに、さつさとみがいている
歌いながら楽しそう

2

(ニ) 何年もくつみがきをしてい

2

(ホ) 14〜15才の少年
じまんしてみがく
えばるように口笛をふきな

1

1

1

②少年はなぜくつを高くもちあげて、すかしてみているのだろう

(ア) 確かめるため

30

・まだたりないところはな

18

・星や月の光がうつるか確かめる

5

・作者がぬいでくれたのがうれしくて、よりにていねいに
・きれいなきでよごれている
・のがいや
・初めての客だから、ていね

2

4

(イ) いに
じまんしているように

1 1

③少年はどんな人からか

まじめ
仕事が好きで熱心
やさしい、あたたかい心
明るい
最後までやりとげる
ていねい

8

正直

3

きちょう面

2

きれいな心

2

内気でおとなしい

2

むじやき

1

親切にされると親切にする

1

物をていねいに扱う

1

人の心がよくわかる

1

親孝行

1

ユーモアがあるようだ

1

ゆかいな少年

1

謙虚

1

おひとよし

1

かわいそうな人

1

あたりまえだと思っている

1

元氣

1

まだここでは子どもたちのとらえ方は散漫であり、ほとんどの子どもがイメージとしては②のところでも理解できるようにいい子としてとらえており人がらを概念化して述べるとなると表現にかなりの幅が見ら

れる。たとえば、優秀児であるM児の場合、この部分では「とても几帳面で、むじや気などところもあり、自分の仕事に責任をもっている。」程度の表現しかできないが、作品の最後では「何か偉大なものをもっているがそれを表面に見せびらかさない静かな少年」としているのである。

(三)

「もうそれくらいでいい」「まだまだ」二人の対話から、わたしの気持ちの微妙な動き、それに対する少年の態度から、二人の人がらをかなりはつきりとした形にとらえてきてい

ることが予想される。

①この部分で感じたこと、思ったこと

(ア) 少年の心持ちを書いた者

28

a 少しでもきれいにしよう
と気がすむまでやりとげる

12

b 客を大切にし、よろこんでもらいたい。いい客だからなお

8

c 一生懸命でいねいに、心がきれ

4

d 少年は「私」に対して親しききもってきたので、すごくきれいにやろう

2

(イ) e その他
わたしの気持ちを書いた者
少年が気の毒になつてきた

2

ここで目だつてきたのは、わたしと少年を心の触れ合った関係として、子どもたちはとらえはじめてい

ることだ。表には子どもの解答を要約しているため十分に意が尽くせて

はいないが、a・b・d・(イ)の場合などからも、その気持ちは伺えるはずである。「作者は少年が気の毒になつた。それを知つた少年はうれ

しくて、なおみがく。」という二人の関係の上に立つたイメージが組み立て

られている。

②「わたしの人がらに対する考えが変わつたり、つけたしたいところがあれば書きなさい」

(ア) ①の段階で神経質↓みがきつぷりをみてまじめな少年だとびっく

りした

(イ) ①の段階でやさしい↓そんなに苦勞してまできれいにしてもらわ

なくてもいい

(ウ) ①の段階で思いやり↓初め、そんなピカピカを期待していなかつ

た

(ニ) ①の段階で内気↓あせりっぽい

人

(ホ) ①の段階でよく考える↓気が短

い

(カ) 他10名書いているが、
①の段階でやさしい、思い(全員)
やり目者である
人を見下げない、人を大切
にする
他はよりくわしく書いている
(註) 矢印は変化の方向
2

「わたし」の心情をつかみきれない者は「もうそれくらいいいよ。」をあせりっぽい、気が短いととらえてしまっているが、不十分である。気の早いことである。

(ア)(イ)の場合、二人の関係としての「わたし」をとらえているのと対照的である。

③少年の人からについて、考えが変わった人、つけたしした人は書きなさい

- (ア) きれいずき→まじめでいいねい 明るい
- (イ) あたたかい→仕事熱心、働き者、くじけない
- (ウ) まじめ→仕事好き、明るい
- (エ) やさしい→働き者、親孝行
- (オ) 元気→いいねい
- (カ) きちよう面・やりとげる→にこやか、親切、客にすかれる
- (キ) やさしい→もうけた金でくらししている

漠然としたあたたかい・まじめ・やさしいから具体的などらえ方をし

てきている。それだけ少年の姿がはっきりしてきたのであろう。

(四)
ここには少年という語がどこにもないが、ここでは、当然少年を存在させて考えねばならない。前の「たねんに」「まだまだ」「やっとな」などの関連を考える時、規定の料金のみしか請求しない必然性と屈託のない明るい少年の顔つきが想像されよう。また、なぜそんなにいいねいに磨いていたのか、子どもに考えさせられるであろう。

①この部分で感じたこと、思ったこと

- (ア) 少年を書いた者
a 心のよい少年 (形容詞はいろいろ)
b お金だけで働いているのではない、いいねいにするのはあたりまえ、初めから余分に取る気持ちはない、だれにでもいいねいにする
 - c 私をよるこばせ、また来るように
 - (イ) a あんまり磨きすぎるのとお金をいっぱいとられなほかつとした
b わたしはおどろいたと思
- 1 2 1 17 10

この漠然とした発問に対して、子どもはどう答えるか、興味ある部分であった。果たして、彼らは表に表われたような結果で、私自身かなり満足感を持った。もちろん(ア)は17名全員がこのとおり書いたのではないうが大同小異であった。これは作品の最後の部分「特別なことをしたり、言ったりしたような顔はしてない。そしてもう次の客のくつを磨き始めた。」につながる伏線として、少年を考えてこの部分を読まなければならぬ。

②「わたしの人からについて、考えが変わったり、つけたしのある人は書きなさい」

- (ア) 世の中のことをよく知っている、今までにいろいろなことを経験してきている 2
- (イ) 心配しがちな人
- (ウ) 心配しがちな人
- (エ) 人の気持ちを考える 5
- (オ) 少年をいい子だと思ってい↑気が短い↑よく考える 1

(イ)の場合、余分なお金を取られるのではと一瞬わたしは思ったであろうと想像した子である。①の(イ)と共にこのあたり、十分に話し合わせたところである。

③少年について考えが変わった人、つけたしの人を書きなさい

ここでは①で述べられ、ほとんど解答はなかった。①の場合、少年へ対する考えの変化から、更に「お金だけで、働いているのではない……云々」の(ア)のbが55%も増えていることに子どもの読みとりの深まりが見られる。

(五)
なぜ、みがいては、すかして見ていたのかと、わたしは聞いてみた。光りだして、空の星が写るまでみがくのです。と、少年は答えた。月のある時には、月を写すと言う。星も月もないときには、近くのネオンを星に見たてるのだそうだ。

星が写るまで磨き上げようとする少年のひたむきな真心と星の関係から、少年の心||星への連想へと進みきつかけとなる山にかかる部分である。

力の低い子どもはここでつまずきの予想が十分される場面でもある。感じたこと、思ったことを書きなさい

- (ア) 真心こめて磨いたということについて書いた者 25
- ・そこまで、少年は仕事にやる気がある
- ・心をこめて、磨こうとしていることがわかる
- ・星が写るまで、写るようきれいに磨こうとしていた

(イ) 文題「下界の星」について
考えた者

・ 題はこのことからつけた	1	6
・ 下界の星とはくつつに星がうつるまでという少年の心、作者はそれに感動している	3	
・ 下界の星とはくつつに写った星のこと	2	

当初の予想として、(ア)は十分に考えられたが、子どもの中の何%かはここでつまづくのではなからうかという予想もしていたが、すでにここで文題を考えた子どもが六名もあり、それも予想外の子どもであったことは意外であった。しかも、三名は明確に作者の連想としての下界の星を読みとっているのである。ただ着眼点としては、大変いいのだが下界の星がくつつに写った星のことであるとした者が二名、文題はここでつけられていると早計に考えた者一名、この三名がこの場合気になるのである。

- 前者の場合
- ①最後には読みとっている。
- ②くつつの光のことに変わった。
- 後者の場合
- くつつにうつる星としている。
- (六) わたしは、自分のくつつを見た。
このあたりは小さきみに分けて与えた。

― 感じたこと、思ったことについて ―

(ア) ほんとうに、そのくらいきれいになったかどうかと思っ て確かめた	22
(イ) 磨き上げられたくつつには少年の心がしみこんでいると少し げしげとみた	5
(ウ) あまりにもきれいなのでびっくりした	2
(エ) 無答	2

(七)

― 感じたこと、思ったことについて ―

くつつ先に星が写っているような気がした。

(ア) 少年が真心こめて磨いてくれ、ほんとうにそのくらいきれいになっていたので、そんな気がした	23
(イ) 少年の真心が見えるような気がした	2
(ウ) 少年が言ったのはほんとうだと思ひこんだ	3
(エ) 星がほんとうに写っている本当に、星がついていたのでびっくりした	1 2

(ウ)はイメージとしては同質であると考えられるし、(エ)と合わせて作者の連想の表象化としては、つまずいており、指導・助言が必要である。

(八) くつつみがきの少年の顔を見た。べつに、特別なことをしたり、言ったりしたような顔もしていない。そして、もう次の客のくつつをみがき始めた。

① 感じたこと、思ったことを書きなさい

(ア) 少年はいつもこのくらいきれいに磨いており、あたりまえになつていて	18
・ 特別にしてくれと思った	1
・ わたしは感心した	2
・ すばらしいことをしても、いばったりしない	5
・ ほめてもらおうと、しているのではない	1
・ 自分自身働く喜びを味わっている	1
(イ) 時間を有効に使う	1

② 少年の人がらについて書きなさい

(ア) いいことをあたりまえのよう うにしている	14
(イ) 正直で心がきれい やさしい。すなお	13
(ウ) お客によるこんでもらおうとする	5
(エ) 最後までやりとおす	1
(オ) 大きな夢をもっている	1
(カ) 大きな心をもっている	1
(キ) すがすがしい	1
(ク) 頭がよい	1
(ケ) ベテランのくつつみがき	1
(コ) きれいずき	1

今までに幾度も少年の人がらについて問うてきたが、(ア)・(ウ)等に見られるように、考えは深まっている。

(九) わたしは歩き出した。星のついたくつつを歩いて、天上をかつぽして
いるような気持ちになった。
物語はここで終わっている。「星の
ついたくつつ」「天上を闊歩する」等の
作者の連想から、文題の「下界の星」
へと連想は昇華され、象徴されるの
である。

① 星のついたくつつとはどんなくつつでしょう

(ア) 少年の真心がついているよ うなくつつ	12
(イ) ピカピカで星がうつっている ようなくつつ	11
(ウ) とてもきれいで星のように 光っている	4
(エ) 星がくつつについてきれいに 光っている	2
(オ) 天上を歩けるようなくつつ	1

② わたしはどんな気持ちで歩いていま
すか

(ア) 軽やかにいい気持ちで心が うきうきして、にこにこして	15
(イ) きどって、自慢したげに胸 をはり大またで堂々と	11
(ウ) 少年のことを考えながら(ア) か(イ)で	8
(エ) 天使になったように	1

③ 闊歩するとはどんなことでしょう

(ア) 軽やかに、はずむように
てスキップしたり口笛を吹い
て歩くような気持ち

11

・ふわふわと空の上を歩くように	5
・夢の国へ行ったような気持で歩く	1
(イ) 天上を自分のものにしたような、美しい星をつけているようで得意になり、また、自慢したげに堂々と歩いている様子	11
・大試合に勝ったような気持で	1
(ウ) おそろおそろもったいなさそうに歩く(やぶれるのじやないか)	1
	12
	17

「かっぱ」と私が読むと、一斉に「かっぱって何だろう。」と声を上げる。闊歩と板書してあとは子どもに想像させたのが表③である。「闊歩する」ということばを考える時、子ども達は板書の字面でおおよその見当はつけているが、さらに、作者はどんな気持ちだったろうか、するとどんな歩き方をしていたかを連想していく。とにかくすばらしい少年に出会い、いい気持ちでいることは明らかである。しかも、くつはピカピカ。そのような時、大きく胸を張って、堂々と歩くか。楽しく、気持ち弾み軽やかに歩くか。二通りの考え方が想像できる。答えの中には「おそろおそろ」というものもあったが、明らかに誤りである。広辞苑によると、闊歩とは、①ゆったりと歩くこと。大股に歩くさま。②傍若

無人に行動すること。いばって歩くさま。とある。辞典的な解釈をすれば、前者になるが、子どもは楽しい時、果たして大股でゆったりと歩くだろうか。教室で、この場面を最後に歩かせてみたが、軽やかに歩く子どもはいきいきとして楽しそうである。本来、楽しい時、跳びはね、軽やかに歩くことの多い子どものイメージは、後者を取りたくなっても不自然ではない。それにしても、大試合に勝った時の気持ちとは名言ではないか。

↓下界の星とはなにか

(ア) 美しい心をもった少年のこと	26
(イ) くつの光のこと	2
(ウ) くつにうつる星のこと	1
(四) くつにうつるネオンのこと	1
(オ) 心のこもったくつのこと	1

(最初の連想との比較)

くつの光	↑地球
くつの光	↑まずしい姉弟
心のこもったくつ	↑ガンジーのような人
くつにうつる星	↑不明の光るもの
ネオン	↑地球

作者の連想として、象徴的な形象である「下界の星」が84%の五年生に理解されたことは、一度だけ読み聞かされた読みということを考える

と、予想を上回る好結果であった。ただ、問題になってくるのが(イ)の想像でも「下界の星」が象徴的・暗示的な形象であることを認識されていないというところに注目したいのである。共通して言えることは、日頃読書の絶対量が少ないことが特筆される。ここに今後の指導の一つの方向が見いだせる。そして、豊かな想像力、イメージ化の指導、つまり、形象に即して、大いに想像させ思考させていかななくてはならない。

■おわりに■

形象に即して想像し、思考していった時、この火野葦平作「下界の星」は五年生においてもけっして難解な作品とはいえない。その理由としてこの作品は構成・表現に無駄が無く、実によく整理され形象化されているためである。また、誠意と真心で当然のようにくつを磨く、ひたすらな少年の姿に感動するすべし、美しい作者の心情に主題を求めた時、作品の底流として暖かく脈々と流れるその主題はけっして複雑・高度な思想によるものではない。平凡な、ごくありふれた少年の行為であり、だれでもが達し得るであろう、身近か

な問題である。高学年では十分理解できるものである。しかし、下界の星をくつの光、くつに写る星、ネオン等としてとらえた一部の児童は、十分に形象を読みとらず昇華しきれなかったところにつまりずきの原因はあり、日頃の読書生活からの問題を内包している。が、教師の適切な指導と他の子どもと共に集団思考の中において、十分理解を深めていける可能性を残している。

この作品は、以上のようなわけで五年生後期から六年生前期を対象にして考えることが妥当であろう。最後に、この調査対象が一学級・三十一名の小数に終わったことは残念であったが、一応の見通しは立てられたと思っている。方法においても、読みっぱなしではなく、一区切りごとに板書するか、カードにして張ってやれば前後の読みとりももっと抵抗が少なくなつたのではなかったかと反省している。(玉川学園小学部教諭)

